

～唐津城石垣再築整備事業に伴う文化財調査～

「唐津城跡」本丸文化財調査 現地説明会 平成23年10月30日(日)

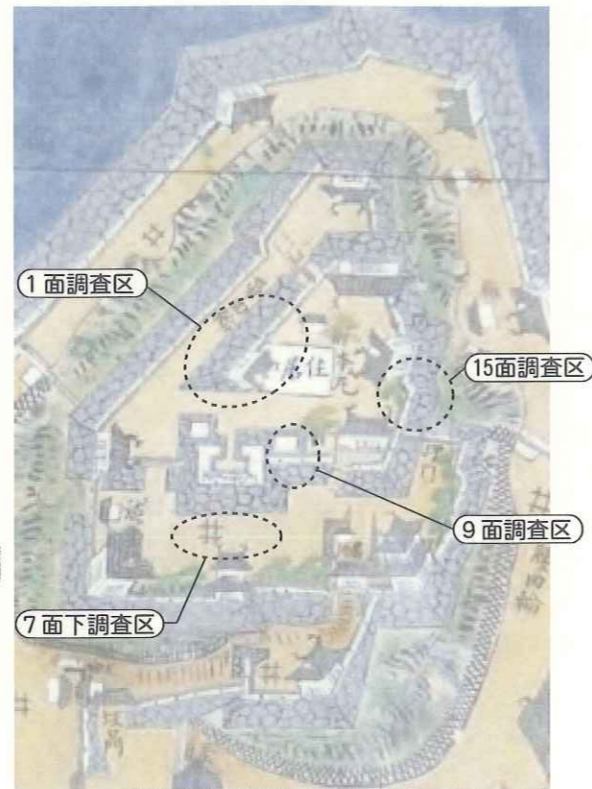
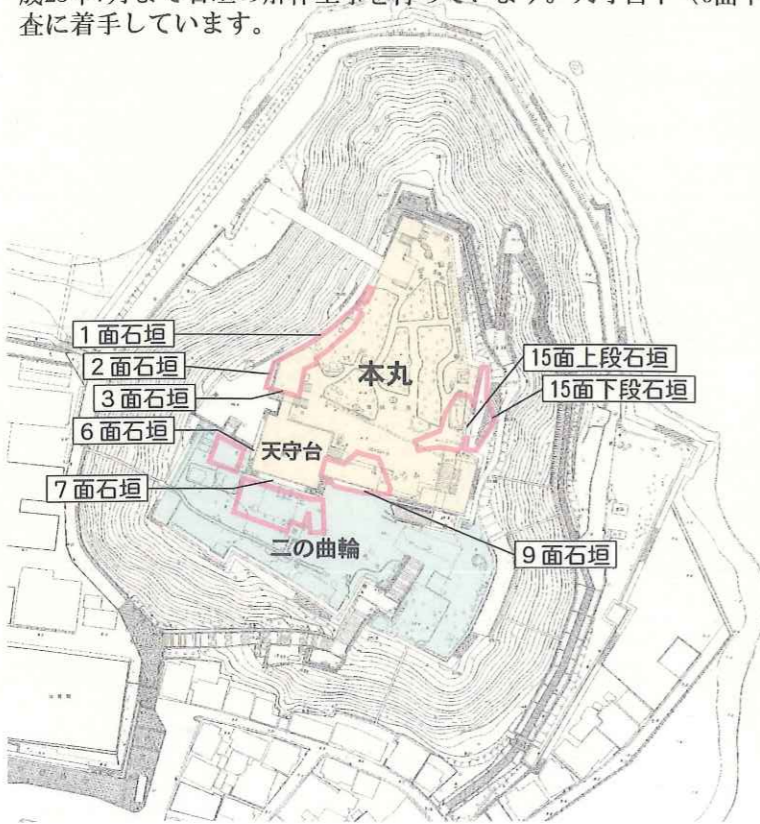
★文化財調査成果のポイント★

- ①二の曲輪の地下から古い石垣を発見  
二の曲輪の地下から古い石垣(旧石垣)を発見しました。石垣石材やその積み方等から、旧石垣の構築年代の下限が慶長年間(1596～1615)前半と考えられ、唐津城最古の石垣の発見となりました。
- ②本丸形状を大改造  
旧石垣は南北に延び、天守台石垣の下に続いています。天守台石垣は旧石垣を埋めた後に築かれたようです。旧石垣を埋めた土からは、16世紀～17世紀初め頃の遺物が出土しており、慶長年間(1596～1615)の後半には壊されて埋められたと考えられます。
- ③金箔瓦の発見  
旧石垣裏の盛土の中から、金箔瓦の破片が4点出土しました。
- ④唐津城築城の謎の解明  
金箔瓦が旧石垣の裏から出土したことにより、旧石垣が築かれる以前に、満島山に金箔瓦を用いた建物が建てられていたことが明らかになりました。つまり、天正十九年(1591)の名護屋城築城を上限として、唐津城が築城される慶長七年(1602)までの間に、「金箔瓦を用いる程の重要構造物が建つ拠点が豊臣政権によって築かれていた」という可能性を示す物証が、初めて発見されたこととなります。

○調査に至る経緯○

唐津城の石垣は築城されてから400年が経過し、石材の劣化や石垣の孕みなどが目立つようになってきました。平成17年には、石垣修復の専門家から崩落の危険性が改めて指摘され、唐津市では約3年をかけて総合的な調査を実施することとなりました。またそれと並行して専門委員会を立ち上げ、土木や文化財など様々な視点から、石垣修復の方向性や方法についての検討を重ねてきました。

その成果を受けて、平成20年度から石垣再築整備事業が始まりました。まず15面調査区(15面上段・下段石垣とその掘削予定範囲)を対象に平成20年10月から事前の発掘調査を、平成21年3月から6月まで15面上段・下段石垣の解体を行い、今後の石垣修復に必要な仮設作業道を設置しました。平成21年10月からは1面調査区(1～3面石垣とその掘削予定範囲)の発掘調査に着手し、平成22年4月から平成23年6月まで石垣の解体工事を行っています。さらに平成22年5月から9面調査区(9面石垣とその掘削予定範囲)で発掘調査を行い、引き続き平成22年11月から平成23年7月まで石垣の解体工事を行っています。天守台下(6面下・7面下調査区)では、平成22年12月から発掘調査に着手しています。



唐津城絵図(江戸時代中期)唐津城天守閣に展示中

○唐津城の概要○

唐津城は、寺沢志摩守広高により、慶長七年(1602)から慶長十三年(1608)に築城されたと伝えられています。その形は、唐津湾を臨む満島山を本丸とし、南西に広がる砂丘上に二の丸、三の丸を配置したもので、三の丸の周囲には城下町が造られました。満島山を中心に、虹の松原と西の浜一帯の松原が弧を描いて東西に広がっている姿から、舞鶴城とも呼ばれています。

寺沢広高は、唐津城築城に並行して、松浦川の改修・虹の松原の植林・新田開発を行い、現代に通じる近世唐津の基礎を造りました。また、天草の富岡城築城をはじめ、近年では唐津市厳木町にある獅子城も大改修を行っていたことが明らかになり、地域の拠点づくりにも尽力しました。このころ寺沢氏は12万3千石を領する外様大名へと成長していきま

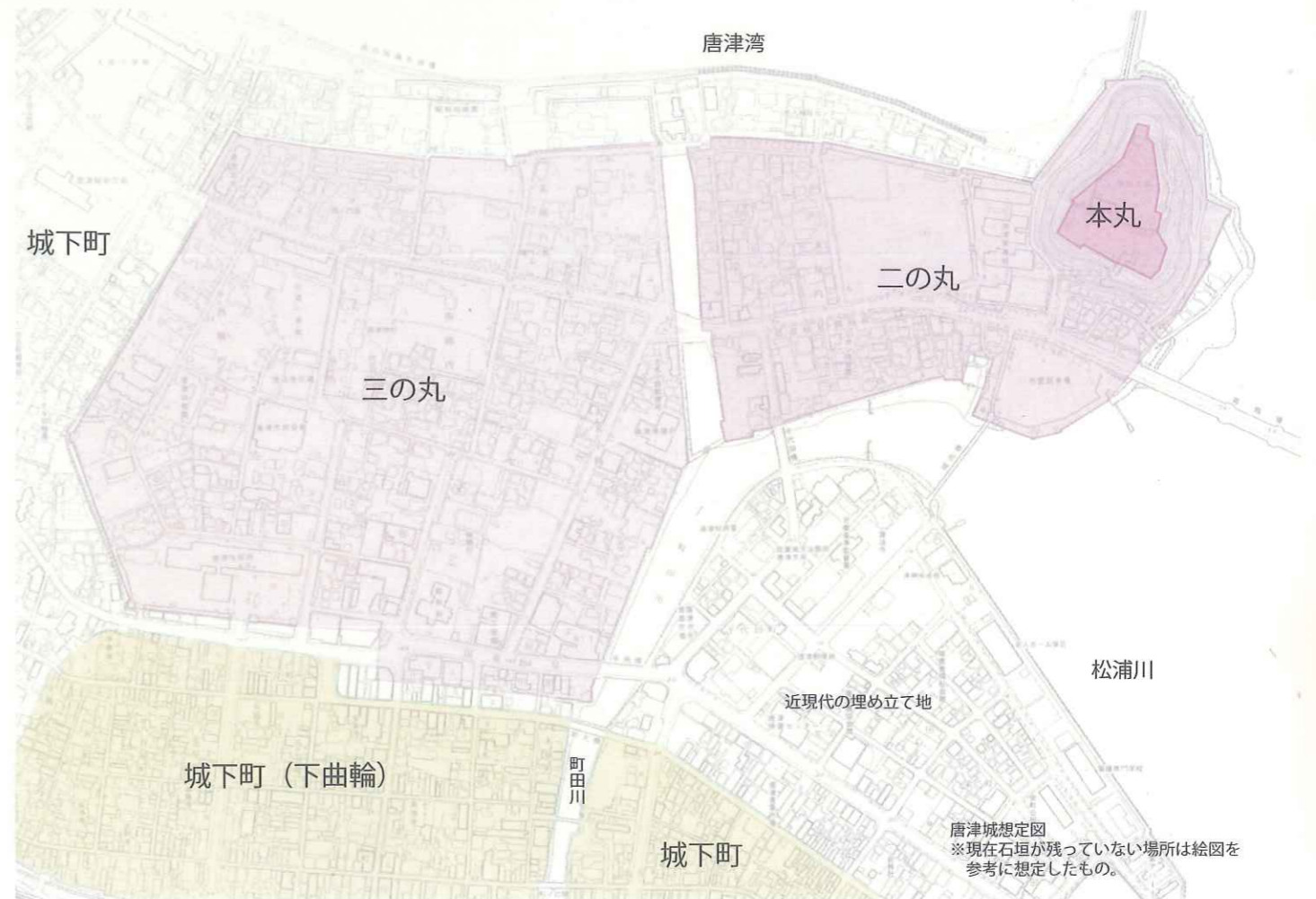
しかし、寛永十四年(1637)に起きた島原の乱の責任をとり、天草郡4万石が没収されました。さらに、嗣子がいなかった寺沢堅高が正保四年(1647)に自害すると、寺沢家は断絶、改易となり、一時唐津藩は天領となりました。

その後、譜代大名の大久保、松平、土井、水野、小笠原と五つもの家が転封を繰り返しています。唐津藩は、長崎警護を担当した佐賀藩と福岡藩の目付役として重要な任務があり、これらの外様大名を監視する譜代大名がこれにあたったようです。

その後明治維新を迎え、明治四年(1871)の廃藩置県により、唐津藩はその歴史に幕を閉じるのです。明治十年(1877)には舞鶴公園として整備、昭和四十一年(1966)に模擬天守が建設されて現在に至っています。

唐津城関連の主な出来事

- 1591(天正19年) 肥前名護屋城築城開始。
- 1592(文禄元年) 肥前名護屋城完成。文禄の役開戦。
- 1593(文禄2年) 文禄の役終戦。波多三河守親、改易。
- 1595(文禄4年) 寺沢広高、唐津に入封。
- 1597(慶長2年) 慶長の役開戦。
- 1598(慶長3年) 豊臣秀吉死去、慶長の役終戦。
- 1600(慶長5年) 関ヶ原の戦い。
- 1602(慶長7年) 唐津城築城開始。
- 1603(慶長8年) 江戸幕府が開かれる。
- 1608(慶長13年) 唐津城完成。
- 1615(慶長20年) 大坂夏の陣。
- 1637(寛永14年) 島原の乱勃発。
- 1647(正保4年) 寺沢堅高自害。寺沢家断絶、改易。
- 1648(慶安元年) 一時天領となる。
- 1649(慶安2年) 大久保忠職、播磨石落より入封。
- 1678(延宝6年) 大久保忠朝、下総佐倉藩へ転封、松平乗久、下総佐倉藩より入封。
- 1691(元禄4年) 松平乗邑、志摩鳥羽藩へ転封、土井利益、志摩鳥羽藩より入封。
- 1762(宝暦12年) 土井利里、下総古河藩へ転封、水野忠任、三河岡崎藩より入封。
- 1771(明和8年) 虹の松原一揆。
- 1817(文化14年) 水野忠邦、遠江浜松藩へ転封、小笠原長昌、陸奥棚倉藩より入封。
- 1867(慶応3年) 大政奉還。
- 1869(明治2年) 版籍奉還。小笠原長国、藩知事となる。
- 1871(明治4年) 廃藩置県。小笠原長国、免官。幕藩体制の崩壊、唐津城廃城。
- 1873(明治6年) 廃城令。唐津城破却か。
- 1877(明治10年) 舞鶴公園として整備。
- 1966(昭和41年) 本丸天守台に模擬天守建設。
- 1989(平成元年) 三の丸(市役所前)の肥後堀整備。
- 1992(平成4年) 二の丸に時の太鼓建設。
- 1993(平成5年) 三の丸に辰巳櫓建設。
- 2008(平成20年) 唐津城石垣再築整備事業開始。



唐津城想定図 ※現在石垣が残っていない場所は絵図を参考に想定したもの。



## 7面下調査区

### ○二の曲輪の地下から古い石垣を発見

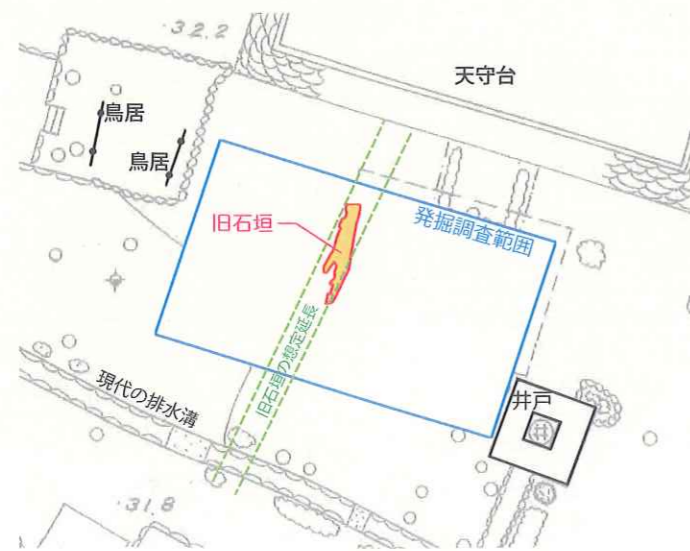
本丸の南側に広がる平坦面は二の曲輪と呼ばれています。このうち天守台南側で行っている発掘調査地点を7面下調査区と呼んでいます。

前回、8月に行った現地説明会以降も、継続して7面下調査区の発掘調査を行っています。7面下調査区一帯は、江戸時代の絵図をみると建物は建てられておらず、構造物のない開けた空間であったようです。現在の地表面から40cm程下に広がる江戸時代の遺構面からは、幕末から明治にかけての廃棄坑等が見つかります。

江戸時代の遺構面の下をさらに掘り下げると、江戸時代の遺構面から約1m下、現在の地表面から約1.5m下で、城内で見られる石垣よりも古い石垣（旧石垣）が見つかりました。旧石垣は東に面して南北に延びており、その北側は天守台石垣の下に潜り込んでいるようです。旧石垣南側の延長線上には、二の曲輪南端に建てられていた櫓台石垣の出角につながります。

確認できた旧石垣は、延長約5.7m、残存高3.5mで、石垣の勾配は66°に整っています。旧石垣裏の地山層（花崗岩パイラン土：マサ土）がさらに1m程上まで残っていることから、旧石垣本来の高さは4.5m以上であったと考えられます。石垣石材は20石を確認しており、50cm程のものから1m大のものまで、その大きさや形は様々ですが、いずれも加工されていない花崗岩の自然石を用いています。下から2～3段目までは同規模の石材を使って石材を用いて横方向の目地が通るように意識しているようにも見えますが、石垣上半部も合わせてみると様々な形状の石材を用いた乱積みになっています。石垣石材同士の間隔が広いため、その隙間に充填する間詰石が多くなっているのが特徴的です。

石垣天端（上部）と左側（南側）の石材が無くなっています。旧石垣が崩壊した可能性も考えられますが、残っている石垣に孕みや変形が無いことや、石垣下の盛土付近に崩落石材が無い等、崩壊の痕跡が全く見られないことから、意図的に石材が引き抜かれたようです。さらに、石垣石材が無くなった部分の旧石垣裏の盛土が、石垣面から1m後ろで垂直切り立った状態で残っていたことから、石垣石材を取り外すのに必要な範囲だけ裏の盛土を削り取った様子うかがえます。



発掘調査地区の平面図 (S=1/400)



旧石垣と天守台石垣（南東から）



旧石垣全景（南東から）



旧石垣正面（東から）



旧石垣の控え出し根石と根切りの様子（南から）



石敷遺構（北から）



旧石垣と石敷遺構（北東から）



9面石垣と旧石垣と（北西から）

根石と呼ばれる石垣の最も下の石材は、10cm程前にせり出しています。最も荷重がかかる根石付近をより強固にするために「控え出し」をして根石を前に出しています。この石垣が使われていたころは、控え出した根石は、盛土により隠れてしまっていたようです。

また、「根切り」の痕跡も確認しました。根切りとは、石垣を築く前に、その一帯を平坦に整え、根石を据える場所を掘り下げることです。こうすることで、根石がずれたり、滑るのを防ぎます。

旧石垣の右上（北西）には、40～50cm大の上面が平坦な石材5石を直線に並べた石敷遺構も見つかりました。石敷遺構の周りには10cm大の栗石が敷き詰められています。石敷遺構の軸は旧石垣の軸と直交しており、旧石垣に向けて低くなっています。石敷遺構の上には、数石の石材がありましたが、現代の攪乱によって大きく乱されており、現在の姿は本来の形状ではないようです。石敷遺構は旧石垣が築かれる際に裏に入れた盛土層の上に据えられていました。

旧石垣直交していることや、旧石垣と同じ盛土層の上に据えられていることから、旧石垣を築く際に合わせて造られたもののようです。旧石垣と連動した溝等の排水施設と考えられ、現在の姿は溝の底石だけが残されているようです。

現在唐津城で見られる天守台等の石垣と旧石垣を比べると、天守台石垣はほぼ同じ大きさに整えられた割石を用いた乱積みで、石垣勾配が77～78°と急勾配のものがほとんどであるのに対し、旧石垣は、様々な形状をした花崗岩の自然石だけを用いた乱積みで、勾配が66°とやや緩やかになっています。

9面石垣の裏から見つかった旧石垣と同じく、唐津城内で最も古い石垣と考えられます。年代が確認しやすい石垣の隅角部（角石）が見つからないため、石垣が築かれた具体的な年代は不明瞭ですが、その特徴から、遅くとも慶長年間前半（1605年頃？）までには築かれていたと考えられます。



## 7面下調査区

### ○本丸形状を大きく改造

二の曲輪で発見した旧石垣は、天守台石垣の軸と平行または直交していません。石垣を築く際には、石垣上の平坦面を広くとるため、また石垣に連動した櫓や門を築くために、石垣の軸が平行または直交するように造ることが基本です。しかし、旧石垣と天守台の軸は90°ではなく、約80°(約100°)で交っており、約10°のズレが生じています。旧石垣は天守台石垣の下に潜り込んでいることから、旧石垣が崩壊して埋められた後に、天守台石垣が築かれています。天守台という巨大な構造物の建設に伴って、本丸内の形状を一新しようとしたのでしょう。

二の曲輪で南北に延びる旧石垣が見つかったことで、旧石垣をはさんで東と西では4～5mの高低差があったこととなります。旧石垣の北は天守台の下に向かって延びていますが、その南側の延長線上は、櫓台石垣隅角部(出角)にあたります。また、旧石垣と二の曲輪西端の石垣の軸がほぼ平行になっています。つまり、旧石垣から二の曲輪西端の石垣までの方形をなす一帯が、元々の曲輪(平坦面)の形状であったと考えられます。

今年7月にも、天守台東側の9面石垣の裏から、壊れた状態の旧石垣が見つっています。今回見つかった旧石垣と同じく、未加工の自然石を用いた乱積みで、石垣の勾配も緩やかになっています。9面石垣裏の旧石垣は、南に面して東西に延びており、西側の延長線上は天守台石垣の中に向かって伸びています。二つの旧石垣は、天守台の中で交わることとなります。9面石垣裏の旧石垣は天守台石垣と時計回りに約6°ズレており、また、今回見つかった旧石垣は天守台と時計回りに100°ズレています。単純に計算すると、二つの石垣がこのまま天守台の中で交差するのであれば、94°の角度となり、直角ではないものの大きな違和感のない入角の形が想像されます。

これから、天守台石垣の解体工事に着手しますので、この旧石垣の形がどのようなになっているのか、今後の調査が期待されます。



旧石垣延長推定図 (S=1/1,000)

### ○金箔瓦の破片が出土

旧石垣の上部は石垣石材が無くなっていましたが、石垣裏の盛土層(5層)は残っていました。5層は、旧石垣面から約1m後ろで、ほぼ垂直に切り立っています。旧石垣石材を取り外す時に、旧石垣から約1mの範囲の盛土を垂直に削り取ったためと考えられます。

この5層の中から、金箔瓦の破片が4点出土しました。小さい破片なので、具体的な形は分かりませんが、目や口の曲線を描くもの、ヒレの形を描くものがあり、いずれも鯉瓦の一部と思われます。粗い胎土を用いており、焼成も良くないため、比較的崩れやすく、柔らかい仕上がりになっています。

これまでも金箔瓦片は出土していましたが、いずれも後世の攪乱層や表土から出土しています。これまで出土した金箔瓦片は、粒子が細かい土を用いてしっかり焼き上げています。このため、堅く仕上がっており、丁寧に模様を作り上げた様子がよくわかります。今回出土した金箔瓦とは違うもののような印象を受けてしまいます。

今回出土した金箔瓦は、旧石垣裏の盛土、つまり唐津城最古の石垣に伴う、最古の盛土から出土しており、これまでの金箔瓦に発見とは違う意味が見出せます。



旧石垣と盛土(北東から)



残された金箔

旧石垣裏の盛土(5層)から出土した金箔瓦の破片

きんぱくがわら

### 金箔瓦って何?

金箔瓦は、瓦の表面に金箔を張り付けた瓦のことです。金箔の接着剤として、赤漆を下地にぬるため、出土する金箔瓦には赤漆や金箔が付着しています。

金箔瓦は全国の40程の城郭で確認されています。城郭用の金箔瓦を使用したのは、織田信長によって築かれた安土城が最初といわれています。信長の死後、豊臣秀吉は織田一門以外の使用が認められなかった金箔瓦を、大坂城で初めて使用し、信長を継いで天下統一を行なうことを示したのです。金箔瓦は豊臣政権の確立により、規制されながらも各地の拠点城郭で、政治的な目的で使用されるようになります。



『よみがえる名城 漆黒の要塞 豊臣の城』「金箔瓦の城塞群」加藤理文2008より引用



出土した金箔瓦の様子



これまでに出土した金箔瓦の破片 (左: 桐紋鬼板、右の3点: 植物紋を描く鬼瓦)



# 7面下調査区

## ○唐津城築城の謎とは？

唐津城は慶長七～十三年（1602～1608）に寺沢志摩守広高によってはじめて築かれたと伝えられていますが、後に後継不在の為寺沢氏は断絶してしまったため、当時の様子を伝える唐津藩の文献は残されておらず、具体的な内容に不明点が多く残されていました。このような中、近年の庄屋文書等の文献調査により、唐津城築城の年代が資料によって異なっていることが知られ始めました。山田洋氏（唐津市文化財保護審議会委員）は、後世に書かれた庄屋文書をもとに、唐津城築城年代の疑問点を整理されています。（「庄屋文書にみる唐津城築造年代の一考察」『末盧国』第172号 松浦史談会 2008）

山田氏の記述を引用すると、唐津城築城年代は、次の三つの説でまとめられています。

### ◇慶長七年築城説

『松浦記集成』

「唐津城普請の事、慶長七壬寅年より同十三戊申年迄七年に成就なり」

『松浦拾風土記巻一』（唐津根元並唐津城根元）

「…唐津城築き始りの事は、慶長七壬寅年より、同十三戊申年迄七年に成就せり」

『松浦要略記』

「慶長七壬丑（寅）年より始り同十二年まで七ヶ年にて御成就これあり候」

『唐津根元記』吉井文書

「慶長七壬寅年より唐津御城御普請御取り懸り、同十三戊申迄七ヶ年築之名古屋の城を移し給ふ」

### ◇慶長七年以前築城説

『松浦拾風土記巻二』（天満宮並連歌奉納之事）

「鶴城御築は、文禄四年に始りて慶長七年に終わる。実年七ヶ年なり。大石の天満宮建移は十三ヶ年後、元和元年春正月より三ヶ月に成就なり」

『松浦昔鑑』

「…はじめて田中に御入城成られ、それより文禄年中唐津城取立て、名古屋御城の御材木にて御普請、今の唐津御城これなり」

『太閤様名護屋御在城前後謂書』

「…俄に取掛かり文禄三年より慶長三年迄五ヶ年に御成就、中場より御移り成られ候由申伝え候」

### ◇天正十九年築城説

『征韓武録』（鹿児島県立図書館蔵）

「…去年より肥前唐津名古屋両城義御陣場普請公役、諸国同前に仰せ付けられ…」

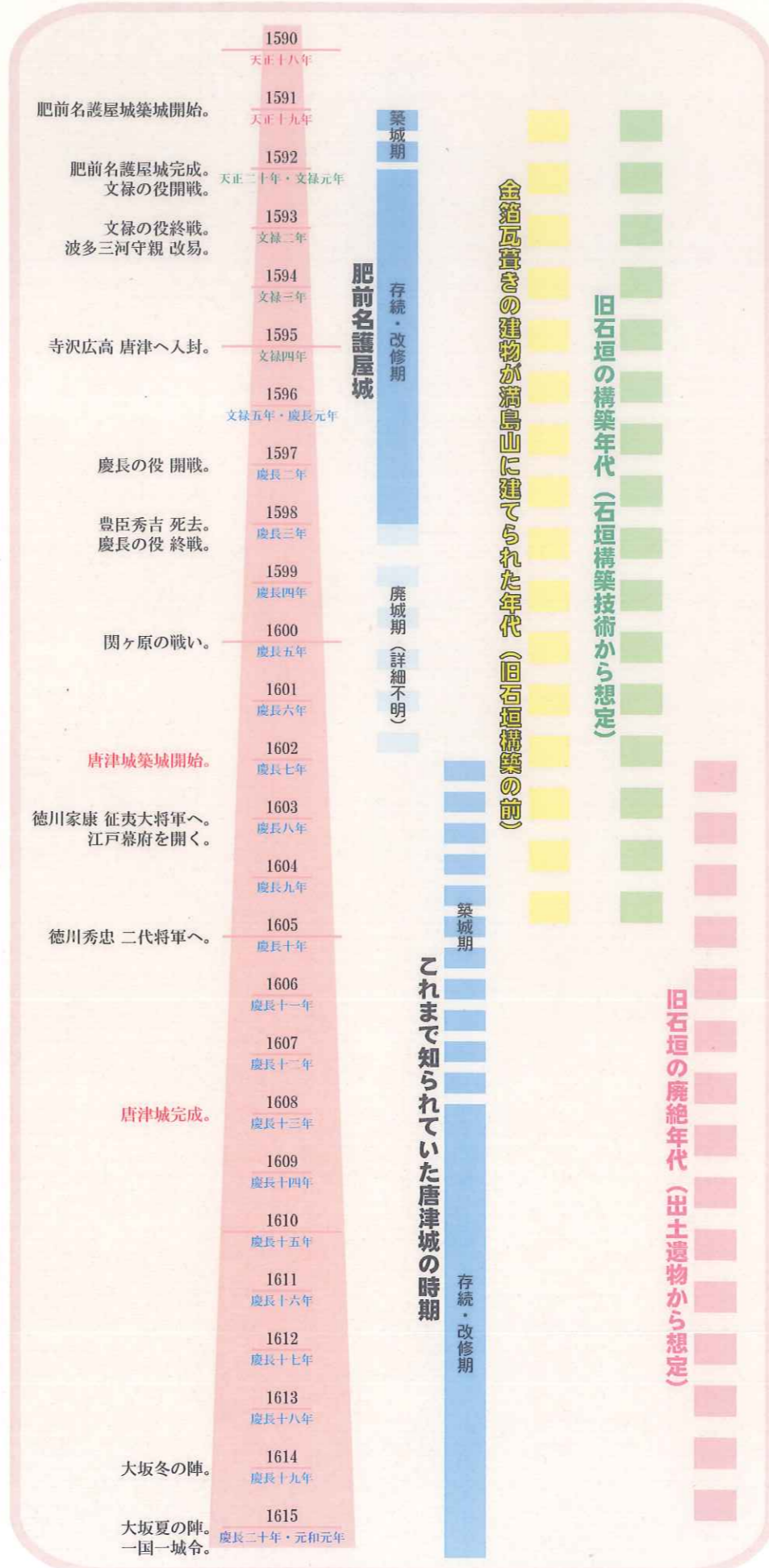
『朝鮮陣留書』（山口県立文書館蔵）

「…唐津とて面白キ津これ在り、彼津にて竹を公儀よりこれを遣わされ候、彼津によき城あるのよし聞き候て吾等式名にて見物申し候」

上記資料のうち、『征韓武録』は明治二十一年（一八八八）に出版された武録で、島津氏が、朝鮮出兵に際して、鹿児島を出発し帰国するまでの様子を記したものの、『朝鮮陣留書』は津和野三本松城主吉見元頼の家臣下瀬七兵衛頼直が記した従軍日記。その他は江戸時代中～後期に書かれた唐津藩内の庄屋による庄屋文書です。

掲載された資料が書かれた年代が異なっており、その多くは唐津城築城後、百年以上経過した時点での記述であることや、資料の性格等が異なっていること等から、単純に比較しづらい点も見られます。しかし、このような文献調査により、唐津城が築城年代が、これまで提示されてきた慶長七年（1602）よりも、さかのぼる可能性が指摘され始めたのでした。

このように、唐津城築城の年代は様々で、不明瞭な点が多く、いつ、誰が、どのようにして唐津城を最初に築いたのかを裏付ける物証が無いまま、今日に至っています。



## ○調査成果のまとめ

今回の調査成果を整理すると、次のような状況が見出せます。

### ①旧石垣の構築年代

自然石を用いた乱積みであるといった技術的な視点から、旧石垣が築かれた年代は、下限が慶長年間前半と考えられます。さらに、肥前名護屋城築城が始まる天正十九年（1591）以降、唐津周辺での豊臣政権の活動が特に活発になる事から、旧石垣構築年代の上限は天正十九年（1591）と想定されます。

### ②金箔瓦を用いた建物の存在

旧石垣の裏から金箔瓦片が出土したことから、旧石垣が築かれる前に、すでに金箔瓦を用いる程の重要構造物が満島山に建てられたことが明らかになりました。しかもその建物は旧石垣が築かれた時には壊されてしまっています。

### ③旧石垣の廃棄と本丸の大改造

旧石垣を埋めた盛土の中から、16世紀～17世紀初頭の遺物が出土していることから、17世紀初頭以降、つまり唐津藩初代寺沢氏の頃に旧石垣が廃棄され、埋められています。また、旧石垣を廃棄して二の曲輪南側の石垣や天守台石垣を築く等の大改造を行い、本丸の形状を大きく変えています。

## ○いつ、誰が、何のために？

調査成果から考えると、寺沢志摩守広高が唐津城を築城し始めたこととされる慶長七年（1602）より前に、旧石垣が築かれていた可能性が十分に考えられます。さらに、金箔瓦を用いた建物が慶長七年よりも前に建てられていた可能性は高いと言えるでしょう。

肥前名護屋城廃城（慶長三年：1598）以降に、金箔瓦を用いた建物や旧石垣が築かれたのであれば、すでに唐津に入封していた寺沢広高によるものであり、金箔瓦は肥前名護屋城のものを転用したことになります。

肥前名護屋城廃城（慶長三年：1598）以前に、金箔瓦を用いた建物や旧石垣が築かれたのであれば、名護屋城築城または改修等に並行して、豊臣政権により満島山に何らかの拠点が築かれていたこととなります。文禄・慶長の役では、名護屋城およびその周囲120に及ぶ各大名の陣屋を本営として、壱岐の勝本城や対馬の清水山城を前衛の拠点、筑前の名島城等を後詰め拠点として連携していたことが知られています。当時の状況から、唐津にもこの連携の一拠点として後詰め拠点の城が築かれていたとも考えることができます。

## ○解け始めた唐津城築城の謎

旧石垣と金箔瓦の発見により、慶長七年（1602）に始まったとされている唐津城築城の前に、文禄・慶長の役における後詰め拠点満島山に築いていた可能性を示す物証が、具体的な遺構や遺物として初めて見つかったこととなります。

このことにより、定説とされていた慶長七年に始まる唐津城の歴史がさかのぼる可能性が高く、また唐津城の前身となる拠点が存在していたと考え、文禄・慶長の役における豊臣政権の連絡・連携体制や、名護屋に集まる人との交易・物流等に唐津が大きく関係していた可能性も見出せます。

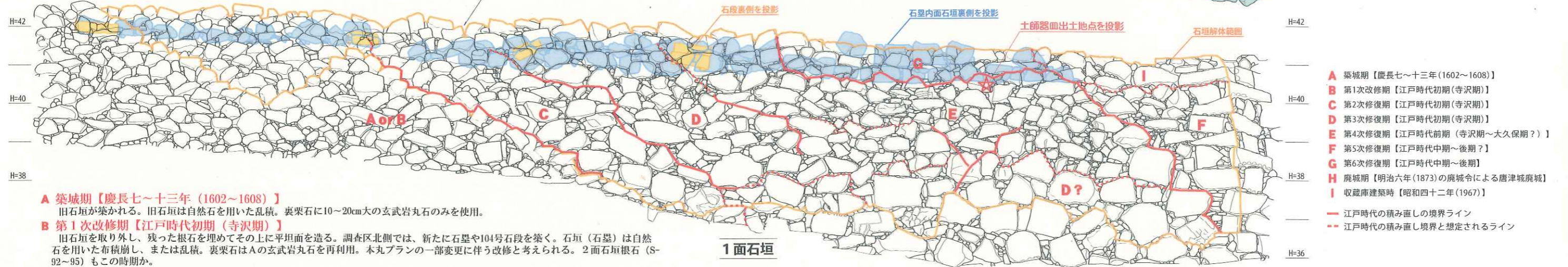
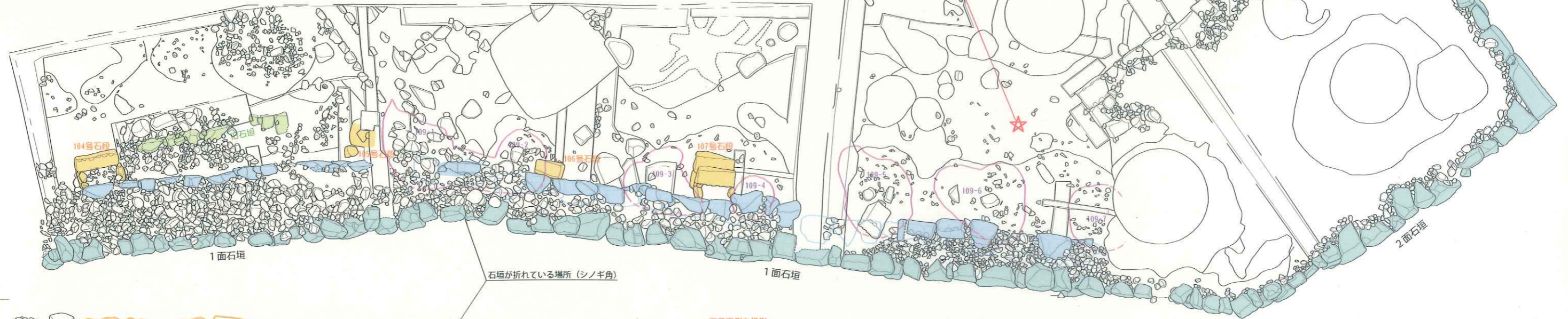
今回の調査成果は、唐津城築城の謎の解明に向けて大きく前進する内容であり、さらに、唐津城と肥前名護屋城との関係が、より密接なものであったことを示す貴重な発見となりました。



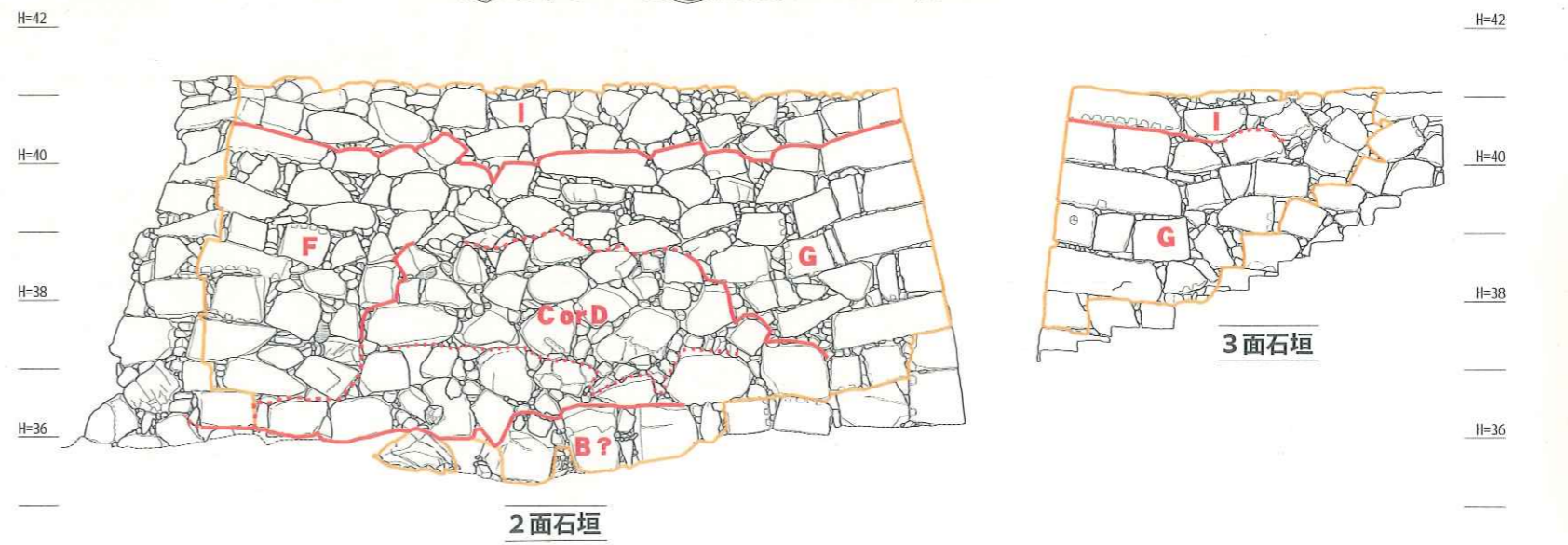
# 1面調査区 (1～3面石垣)

## ○度重なる石垣修復

石垣解体を行った1～3面石垣では、石垣の積み方や裏の栗石の状況、さらに内側にある盛土の状況を調査し、江戸時代に行われた石垣修復の状況が明らかになりました。



- A 築城期【慶長七～十三年(1602～1608)】**  
旧石垣が築かれる。旧石垣は自然石を用いた乱積。裏栗石に10～20cm大の玄武岩丸石のみを使用。
- B 第1次改修期【江戸時代初期(寺沢期)】**  
旧石垣を取り外し、残った根石を埋めてその上に平坦面を造る。調査区北側では、新たに石畳や104号石段を築く。石垣(石畳)は自然石を用いた布積崩し、または乱積。裏栗石はAの玄武岩丸石を再利用。本丸プランの一部変更に伴う改修と考えられる。2面石垣根石(S-92～95)もこの時期か。
- C 第2次修復期【江戸時代初期(寺沢期)】**  
105号石段付近から南側にかけて、1面石垣の根石付近まで崩壊。自然石を用いて積み直し、裏栗石は玄武岩丸石を再利用しつつ、一部不足分を花崗岩角礫で補う。盛土は8層(版築状に堆積する砂質土)が対応。修復時に石畳を据え直し(石畳内面石垣の軸がやや折れている)、105号石段を設けている。
- D 第3次修復期【江戸時代初期(寺沢期)】**  
1面石垣のシノギ角以南が根石付近またはそれより下の地盤ごと崩壊。自然石を用いて積み直し、裏栗石は10～20cm大の花崗岩角礫を中心に、玄武岩丸石を2～3割程度含む。築石程の石材が不規則に混入する。盛土は砂層が対応し、備前掘鉢や京都系土師器皿、瓦片等、16世紀末～17世紀前期の遺物が出土。修復時には石畳を据え直し、106号石段を設けている。2面石垣では、根石(S-92～95)を残し、これより上の石材が崩壊したのがこの時期、または前のCか。
- E 第4次修復期【江戸時代前期(寺沢期～大久保期?)】**  
107号石段より南側の石垣を修復。築石は50～70cm程度の比較的小さい自然石と粗割石を用いて積み直している。数種の栗石が塊として確認できることから、更に細分される(時期差が生じる)可能性がある。
- F 第5次修復期【江戸時代中期～後期?】**  
1面石垣と2面石垣の隅角部付近。角石は算木積みのように互い違いに積む意図は汲み取れるが、石材の選び方や積み方、稜線の通し方に安定感を見出せない。裏栗石は10cm以下の小さな花崗岩角礫と玄武岩丸石をほぼ同量用いる。盛土部分は基礎パイルにより大きく削り取られている。位置的には7層(海砂)と対応するものか。
- G 第6次修復期【江戸時代中期～後期】**  
2面石垣と3面石垣の隅角部付近。橋台の角石に控えが長い加工石を用いるものの、根石付近(S-57・S-75)が算木積みになっていない。裏栗石は10～20cm大の花崗岩角礫と玄武岩丸石をほぼ同量用い、さらに目潰しとして小粒の礫を含む。また、石畳南側の内面石垣は、橋台内面石垣と同質の花崗岩を用いて同じ積み方(布積み)で築いていることから、同時期に修復されたものと思われる。
- H 廃城期【明治六年(1873)の廃城令による唐津城廃城】**  
石垣に廃城時の痕跡を見出すことはできないが、発掘調査によりこの時期に廃棄された瓦堆積層を確認したことから、橋や堀はすべて解体された様子がうかがえる。明治以降、公園化が進む中で天端石が失われ、石畳や橋台は根石付近を残して取り外され、埋もれていく。
- I 収蔵庫建築時【昭和四十二年(1967)】**  
1面石垣南端から3面石垣の天端付近。



- A** 築城期【慶長七～十三年(1602～1608)】
- B** 第1次改修期【江戸時代初期(寺沢期)】
- C** 第2次修復期【江戸時代初期(寺沢期)】
- D** 第3次修復期【江戸時代初期(寺沢期)】
- E** 第4次修復期【江戸時代前期(寺沢期～大久保期?)】
- F** 第5次修復期【江戸時代中期～後期?】
- G** 第6次修復期【江戸時代中期～後期】
- H** 廃城期【明治六年(1873)の廃城令による唐津城廃城】
- I** 収蔵庫建築時【昭和四十二年(1967)】
- 江戸時代の積み直しの境界ライン
- - 江戸時代の積み直し境界と想定されるライン



1面調査区 (1～3面石垣)



解体前の1～3面石垣（南西から）



解体前の1～3面石垣（北西から）



解体前の1～3面石垣（南西から）



解体前の1～3面石垣（南西から）



解体前の1～3面石垣（南西から）



解体前の1～3面石垣（西から）



解体中の1～3面石垣（北から）【写真は左から、3段目・6段目・8段目・14段目の解体時：根石付近までの段数は全18段】



石垣解体完了時（南西から）



石垣解体完了時（北から）